

Gプロジェクト2023

「twinkle star ～夜空を照らす光になって～」

中村 民恵, 森永 初代, 末永 勝征

G Project 2023

Tamie Nakamura, Hatsuyo Morinaga and Katsuyuki Suenaga

Gプロジェクトとは、学生達が共通の目的ごとにチームを結成し、そのプロジェクトの活動を通して個性の伸長をはかると同時に、プロデュース力、グループ力、コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマを「twinkle star ～夜空を照らす光になって～」に決め、制作してきた作品の集大成を学内で発表した。さらに、錦江町との連携事業“地域貢献プロジェクト”も11年目となった。それぞれのプロジェクトチームがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出を行ったかを、学生たちの活動を中心に報告する。

Key Words: [問題解決能力] [協働] [大学祭] [地域連携] [学士力]

(Received October 21, 2024)

序

Gプロジェクトとは、「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」を目的とした「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。これまで現代ビジネスコースでは、専門教育カリキュラムの系列【Gプロジェクト】において、グループでのコミュニケーション能力を伸ばし、同時に個々人のプロデュース能力を高め、学生の人間としての力を豊かにすることを目標にしてきた。

2022年からは、さらにその活動をよりよく発展させるために5つのプロデュースを「Gプロジェクト」と「地域貢献プロジェクト」の2つに分けて新たにスタートさせた。2022年以前と同様にグループでの活動に対する自分の役割をしっかりと認識した上で、目標実現に向けた計画を立案・実行し、それぞれ特定のテーマをプロジェクトチームで達成できるように改善した。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、様々な学内外の活動が制限されていたが、2023年5月8日から「5類感染症」に移行されたことにより、活動に対する制限が緩和され、日常生活が徐々に通常に戻る中、学習成果の発表の場である大学祭をチェックポイントと位置づけ活動をスタートさせた。外的要因による制限からの解放により、それぞれのプロジェクト

* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

および学生が目標に向かってどのように活動したかについて報告する。

I. Gプロジェクトの活動について

2023年度のGコースのテーマは、「twinkle star ～夜空を照らす光になって～」とした。このテーマには、星のように一人ひとりが輝く存在であり協調性と強い責任感を持って行動する人へ成長できるようにという意味が込められている。

2023年度は、モード・展示・フードの3つのプロジェクトに分かれて活動を行った。

モードプロジェクトはドレス制作が17名、モードプロジェクトの舞台上で流すオープニング・エンディング動画作成をする2名の合計19名で活動した。

展示プロジェクトは、プロジェクト名を「てんG」とし7名のメンバーで活動した。

フードプロジェクトは、伝統のアップルパイのレシピと味を受け継ぐことを目標とし7名で活動した。

2023年度の大学祭は新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」に移行し、制限のあった時期よりも外部の方が来場できる大学祭の開催となった。

大学祭は、2023年11月3日（金）から11月5日（日）の日程で行われ、11月3日（金）は準備と学内発表、11月4日（土）・11月5日（日）の2日間は、学外一般の方に向けて開催された。

学内だけでなく多くの来場者が見込まれた大学祭において、舞台発表と展示部門については、これまでの先輩方のGプロジェクトでの活動を基に自分たちの活動を展開し、それらがどのように来場者に伝わったかを知るためにアンケート調査を実施した。

それぞれの活動と取り組みについてアンケート調査を実施、その結果について報告する。

大学祭におけるアンケート調査は、紙媒体（アンケート用紙）と電子媒体（QRコード読み取り）で実施した。実施期間は11月3日（金）から5日（日）の3日間で、3日（金）の学内発表は学生を対象にGoggle Formsで作成したアンケートを、QRコードで読み取り回答してもらう方法で実施した。4日（土）・5日（日）の一般の来場者には、紙媒体を配布し、会場で記入いただく方法をとった。

一般来場者には、紙媒体でのアンケート調査を実施したのは、2022年、QRコードのみでアンケート調査を行ったところ、回答率が非常に低かったためである。今回報告するのは、学生のみを対象としたアンケート結果と、一般来場者を対象としたアンケート調査の結果である。

学生対象のQRコードを用いた電子アンケートは、invitation cardにQRコードを印刷し会場内で配布した。その結果、QRコードを活用したアンケートの回答数は68件、アンケート用紙の回答数は47件、計115件の回答となった。

2022年度と比べてみると電子媒体の回答数は高くなったが、こちらが想定した数字よりも低かった。回答率を上げるために実施したアンケート用紙については、舞台を見てすぐに回答して下さる方が多かったが、こちらも想定より低い結果となった。

各プロジェクトの取り組みについては次のとおりである。（現代ビジネスコース2年 徳尾優那）

発表部門のモードプロジェクトはプロジェクト名を「Étoile」に決定し活動に取り組んだ。テーマは「Étoile ～ Over the moon ～」,「Étoile」はフランス語で星、一人ひとりが星のように輝く存在であってほしいという願いが込められている。活動内容はオリジナルドレスの製作を基本に舞台背景や動画制作などメンバー全員で協力しながら舞台（図1）を作り上げた。



図1 モードプロジェクトメンバーとスタッフとの集合写真

2023年度も来場者からのアンケート調査で得られた情報を基に自分たちが作り上げた舞台がどのように観客に伝わったのかを考察する。

アンケートは3日（金）～5日（日）の計3日間で実施した。2022年度、先輩方の活動報告よりQRコードのみでアンケートを実施した結果、回答数が非常に少ないことが報告されている。このことを踏まえて、2023年度の実施方法として、一般の来場者については紙媒体、学生はQRコードを読み込む方法で実施した。

紙媒体とQRコードの2パターンで実施したアンケートの項目は下記の通りである。

問1「各シーンがテーマに合っていたか？」については紙媒体とQRコードでの回答にあまり差がなかった。

問2「動画を見て、楽しい光を感じたか？」については一般来場者の観客を対象とした紙媒体では、記入なしが全体の5.8%であった。その理由として、質問の内容が伝わりづらかったのではないかと考える。しかし、学生を対象としたQRコードでは、すべての項目に回答しないと送信できないことから記入なしという回答はなかった。このことから電子的なアンケートは記入漏れを防ぐことや紙媒体より簡単に集計を行うことができるなどというメリットは大きいと考える。

予測ではQRコードでのアンケート調査は手軽に回答できるのではないかと考えた。大講義室で鑑賞した学生のうち68人の協力が得られたが、2023年度も思うように回答率を上げることはできなかった。今後、舞台発表の後にアンケートに回答していただくようにアナウンスをすることやアンケートに回答する時間を設けることがよいのではないかと考える。また、回答者の傾向として、学生の保護者や卒業生など身近な方々がほとんどで一般の回答率が低かったことから、全体的にアンケート結果の評価が高かったと考えられる。

Gプロジェクトの活動を通して、後輩に引き継ぎたいことは次の2つである。1つ目は「自分がやるべきことを明確にしたうえで時間を逆算して行動すること」である。作業の制作過程を見える化し、綿密な計画を立てることで、制作活動だけでなく舞台発表の準備などに時間を充てることができる。2つ目は「チーム内でのコミュニケーションや情報共有を随時行うこと」である。ドレス制作の進捗状況にばらつきが出ないようにする必要がある。メンバー全員で行う

ミーティングの回数を増やすことでチームワークをさらに高めることができると考える。(現代ビジネスコース2年 迫姫乃)

展示プロジェクトは7名のメンバーで、プロジェクト名を「てんG」として活動を行った。主な活動は大学祭で展示会場に設置する催し物の作品制作、フォトスポット、動画撮影・編集、生活学専攻についての掲示物を中心に取り組んだ。

また、会場に設置する作品や動画、展示やゲームの景品に星などをモチーフとした作品を作り、コーステーマにつながるような取り組みを行った。

会場アンケートについては、学生・一般の方の来場者を対象に紙アンケートとQRコードのアンケート実施し、期間は11月4日(土)から11月6日(月)の回答期間を設けた。紙媒体によるアンケートの回答数は26件、QRコードでの回答数は29件、計55件という結果となった。アンケートの項目は生活学専攻の紹介やフォトスポット、複数のゲームブースなど様々な作品場所を設けていた為、それに伴ったアンケート内容を作成した。(現代ビジネスコース2年 徳尾優那)

フードプロジェクトは7名のメンバーで構成され、「もぐもぐフードプロジェクト」をプロジェクト名に、アップルパイの伝統継承を目的として活動に取り組んだ。

前期からフードプロジェクトのメンバーがアップルパイの制作工程や純心アップルパイについての理解を深め、クラス全体で制作する際にサポートできるようにすることを目標とした。

プロジェクトメンバーで先輩方から受け継いだ伝統のアップルパイレシピを参考にポイントを押さえながらクラス全員がわかりやすく伝えられるようにレシピを改善し、11月から12月にかけて4回の試作に取り組んだ。12月の全員で制作した伝統のアップルパイ(図2)は、現代ビジネスコースの1年生、お世話になっている教職員の方々に贈答し、アンケート調査に協力していただいた。



図2 焼き上がりの確認

アンケートはアップルパイをお渡しする際に、クリスマスカードに印刷したQRコードを読み取り回答する方法をとり、アップルパイの焼き色について、生地食感、甘煮に関する内容を中心に設問を考えた。また、設問はプロジェクトメンバーだけでなく、全員に協力してもらいながら検討した。回答数は本コースの学生、教職員を合わせて67件となった。

QRコードが印刷されているカードを何名に配布したのかを把握していなかった為、回答率を調べることができなかった点と、完成したアップルパイを6等分にカットして配布したため、誰が制作したアップルパイを誰が食べたのかを把握できず、回答にかなりの差が生じる結果となったことが問題点として挙げられる。(現代ビジネスコース2年 原田鈴鳴)

2023年度は3つのプロジェクトともGoogle Formを活用しアンケートを作成した。2022年度はSDGsの観点から電子媒体のみでアンケートを実施した結果、想定していた以上に回答率が

低く、状況に応じた活用の仕方を考えるという課題を解決する必要があった。

そのため、2023年度は先輩方からの課題を改善できるようにアンケート調査を行った。まずはアンケートを実施する場所や環境によって、電子媒体と紙媒体のどちらが回答し易いかを考えた。また、回答率をあげるにはアンケート調査をやっていることを知っていただく必要があると考え、会場内でのアナウンスでの周知やアンケートに回答する時間を設けるなどの工夫が大切なのだという改善点があげられた。

今回のGプロジェクトの活動を通して、PDCAサイクルを適用しながらプロジェクトを進めることで、自分達の活動の効率化や質の向上につながることを学んだ。

計画性や危機感に欠けた行動が多発し、すべてのスケジュールがギリギリになってしまうという結果を繰り返した。PDCAサイクルは、プロジェクトの進行を計画的に実施、成果を最大限に発揮する方法であることを学んだ。

2023年度は、メンバーも例年より少なく、一人ひとりの意識や行動が重要となった。全員が自分の役割や責任を明確に認識し、互いにサポートしながら協働する必要があった。また、コースのテーマの「twinkle star ～夜空を照らす光になって～」の意味が、各リーダーたちが思っていた以上に全員に伝わっていなかった。活動中にコーステーマを変更した際など、単に情報を伝えるだけでなくメンバーがどのくらい理解しているのかを確認する必要があった。計画通りにならないことや想定していなかったことが多数発生した。この経験をとおしてリーダーシップや臨機応変に対応する力を高めることができた。予定外の事態に対してメンバーが協力し、問題解決に向けて話し合うことでチームの団結力が強くなったと考える。

今回のプロジェクト活動を通して、ひとりでは成し遂げることができないこともチームで協働することで課題を解決できることを実感した。私たちの活動を支えてくださったすべての方々に感謝の気持ちを忘れずに、これからの人生において人間力を高めていきたい。(現代ビジネスコース2年 徳尾優那)

Ⅱ. 考察

学生たちの授業アンケートを基にGプロジェクトに関する考察を行った結果は、以下の通りである。2022年度からは4つのプロデュースをまとめ、さらなる成果を目指して前期「GプロジェクトⅠ」、後期「GプロジェクトⅡ」として活動を開始した。

Gプロジェクトに関連する科目のディプロマポリシーの位置づけは「適切に情報を共有することができ、それをもとに自ら判断し、行動することができる」、「集団の中での役割を見出し、協働して自らを高める態度を身に付けている」、「問題に気付き、自ら設定した課題に学んできたことを活用することができる」となっている。

「GプロジェクトⅡ」の授業アンケートには97.4%の学生が「全体を通して、意欲的に取り組むことができた。」と回答し、到達目標に十分、概ね到達したと全員の学生が回答し、到達目標を理解し積極的に授業に取り組んでいる姿勢がうかがえる。

同じく、関連科目の「課題実践Ⅱ」の授業アンケートにおいては87.9%の学生が「全体を通して、意欲的に取り組むことができた。」と回答している。

今回はアンケート調査の自由記述にテキストマイニングを選定し、ツールはKH Coderを使用、学生の成長に関する定性的なデータを量的に把握し、共通するワードの可視化を試みた。自由記述の回答率は「GプロジェクトⅡ」、「課題実践Ⅱ」ともに87.9%であった。

テキストマイニングは学生たちが自由記述欄に記載した文章を基に、どのように成長実感があったかについて共通点や特徴を抽出することである。抽出語の出現回数や単語間の関係を特定し、KH Coderでテキストデータを解析、プロジェクトごとの関連を探り、キーワードを可視化できる。

2023年度のGプロジェクトの活動人数は33名、アンケートには全員が回答、プロジェクトごとに学生たちの記載を共起関係で分析、関連するキーワードがどのように結びついているのかを図表化した。その結果を以下に示す。

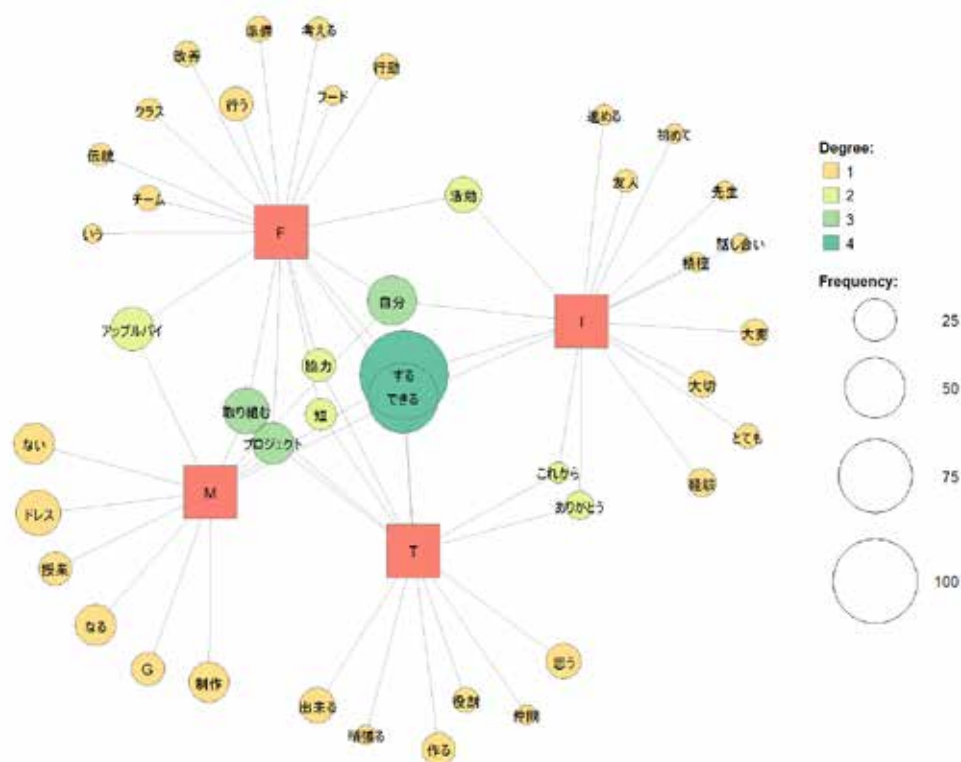


図3 「GプログラムⅡ」授業アンケートの自由記述と各チームの共起ネットワーク

図3と図4に示す、M・I・F・Tはそれぞれのプロジェクト活動の集団を表す。Mはモードプロジェクト、Iはモードプロジェクトの映像担当、Fはフードプロジェクト、Tは展示プロジェクトを示す。

注目したキーワードは「自分」である。キーワード「自分」にキーワード「協力」を通してつながっていることがわかる(図3)。Iとは直接つながっていないが、「自分」を通して「協力」から「プロジェクト」とつながり「M」につながっている。このことからIもモードプロジェ

クトのチームの一員として映像制作に取り組んだことがわかる。

「自分」と「協力」のつながりからみて、キーワード「自分」はプロジェクトにおいて自分がどのようにかかわったのか、役割を果たしたのかを示し、キーワード「協力」は他者とかかわりながらプロジェクトを進めていく過程において、自分の成長を実感するシーンが多かったのではないかと考える。

さらに、キーワードとして「自分」・「できる」・「する」が中心に位置しており、それぞれが課題と向き合いながら活動したことがうかがえる（図4）。

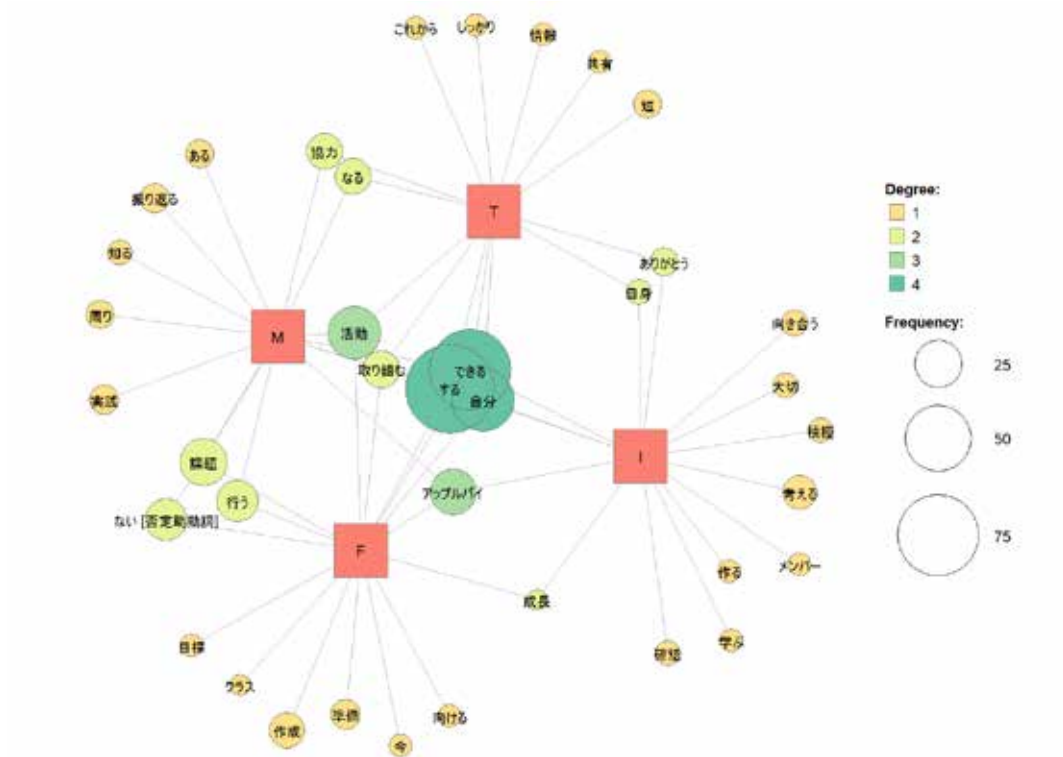


図4 「課題実践研究Ⅱ」授業アンケートの自由記述と各チームの共起ネットワーク

この結果から、キーワード「自分」と「協力」は相互に関連しており、プロジェクト活動において学生一人ひとりの成長に影響を与えていることがわかる。今後はプロジェクトやチームでの活動において、これらのキーワードがどのように関係しているかを可視化することで学生の成長の傾向を明確に把握することができるのではないかと考える。今後も分析結果をもとに学生たちの成長を多面的に把握し、より効果的な教育手法に役立てていきたいと考える。

このように、キーワード「自分」と「協力」を通して達成感を可視化し、人との関わりの中で人は成長することを今後のプロジェクト活動や教育手法の改善につなげ、学生一人ひとりの成長を高めるために協働することでさらに効果的な学びになるように支援していきたい。

Ⅲ. 地域貢献活動について

11年目を迎えた地域貢献プロジェクトは、例年どおり1年次の春休みから活動を開始した。2023年度も「純心水田」で収穫したお米を利用した商品開発を企画していたが、錦江町の老舗菓子店「原製菓」の定番商品「ひとくちげたんは」をアレンジしたコラボ商品を販売することになった。商品決定が遅くなったことにより、発売も3月14日と2022年より1か月ほど遅くなった。そのため、2月に入ってから商品パッケージの最終決定、CM撮影と2年次の春休みにも活動が収束せず、履修者12名の2月末までの活動時間の平均は49.7時間にも及んだ。

新たなボランティアとして取り組んだ「城山の森みつばちプロジェクト2023」は城山ホテル鹿児島がSDGsの一環として企画し、参加する県内の小学生をサポートする活動である。「桜島・錦江湾横断遠泳大会」や「かごしま鴨池リレーマラソン」は、同じ運営ボランティアでも自分たちより年上の参加者が対象である。普段あまり接することのない小学生への対応に慣れない学生もいるようで、相手の身長に合わせて腰をかがめて話しをする、目線や話し方などの工夫が必要となると新たな気づきもあったようである。

活動の取り組み状況については、学生の報告や江角学びの交流センターの地域貢献活動報告(令和5年度)にも記載されている。

2023年度は、例年どおり錦江町で田植えや稲刈りを行う「純心水田プロジェクト」とそのお米を使用した「コラボ商品開発」に取り組んだ。商品開発以外に錦江町の恒例行事「やまんなか音楽会」、「いきいき秋祭り」や鹿児島市で開催された「かごしま鴨池リレーマラソン」、「かごしまお茶マルシェ」など多くの地域イベントにも参加した。また、2023年度は新たに錦江町の神川ビーチに設置される「影絵アート制作」を行った。



図5 商品開発会議の様子

2023年度の「コラボ商品開発」では、サツマイモを材料とする商品を提案していた。錦江町役場・総広・山形屋ストア・城山ストア・コープかごしま・Aコープの方々と3回の商品開発会議(図5)を行い、出た課題を商品開発メンバーだけでなくクラス全員に情報共有し、商品概要やパッケージ案などの意見を募り、企画提案を行った。しかし、様々な課題からこれまでと同じ企業での製造は難しいという結果になった。そのため、錦江町に行くたびにお世話になっている原製菓の人気商品である「げたんは」をアレンジしたコラボ商品を製作することとなった。

「げたんは」とは昔から鹿児島に伝わる黒砂糖を使ったお菓子である。名前の由来は下駄の歯の意味で、もともとの格好が似ているからそう呼ばれたと言われている。小麦粉、黒砂糖、鶏卵を主原料にして生地を作り、黒砂糖の蜜の中に漬け込み、仕上げたお菓子で、今回は錦江町の特産品から「げ



図6 完成したコラボ商品

たんは」に合いそうな「お茶」と「落花生」を募集の中から選び、試作と試食を重ねた結果、錦江町産のお茶の葉を練りこんだ商品を販売することが決まった。また、パッケージは現代ビジネスコースの1・2年生に募集を行った。伝統あるお菓子とのコラボ商品ということで見る人の興味を引くアイデアをと要望をいただき、直前まで修正を行った（図6）。CMの撮影は2月21日に7名の学生が参加し、本学で行われた。

2023年度は、「影絵アート制作」という新しい企画にも挑戦した。5月に錦江町の神川ビーチに設置するため、テーマを「夏らしいもの」として学生13名で4つの班に分けて取り組んだ。大きな一枚板に自分たちで考えた下絵を描き、電動のこぎりで切り出す作業までを行った。班ごとに協力し、様々なアイデアを出しながらイルカ・七夕・かぼちゃの馬車・ひまわりを完成させた（図7）。神川ビーチには多くの観光客がいらっしやるため、見てくださる方々に楽しんでいただけるような工夫を行った。この活動を通し、新しいことに挑戦する楽しさや達成感を得ることができ、その後の自信や積極性につなげることができた。また、自分たちのことだけでなく、その活動の目的を考えて行動することの大切さを学ぶことができた。



図7 影絵アートを制作した様子

また、錦江町で行われる「やまんなか音楽会」に向けて事前に現代ビジネスコース1・2年生全員で牛乳パックを再利用した灯籠を制作した。「やまんなか音楽会」当日は制作した牛乳パック灯籠を配置し（図8 牛乳パックと紙袋灯籠）、中にろうそくを灯す作業を行った。自分たちが想像していた以上に明るさが足りず、今後制作する後輩には改善してもらうよう引き継ぎたい。

また、錦江町で行われる「やまんなか音楽会」に向けて事前に現代ビジネスコース1・2年生全員で牛乳パックを再利用した灯籠を制作した。「やまんなか音楽会」当日は制作した牛乳パック灯籠を配置し（図8 牛乳パックと紙袋灯籠）、中にろうそくを灯す作業を行った。自分たちが想像していた以上に明るさが足りず、今後制作する後輩には改善してもらうよう引き継ぎたい。



図8 牛乳パックと紙袋灯籠

2023年度の地域貢献活動を振り返り、錦江町の豊かな自然の中で普段できないような貴重な体験をすることができた。全ての活動において、事前準備・資料作成・プレゼンテーションなど一人ひとりが責任感を持ち行動したおかげで、毎回の活動を協力しながら成功させることができたと思う。この地域との関わりに感謝し、経験を今後の活動に生かし貢献していきたい。（現代ビジネスコース2年 岩元楓／小谷悠歩）

結 び

Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略ーコミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成ー」という課題名で、2008年度から3年間、文部科学省の「私立大学等経常費補助金特別補助＜教育・学習方法等改善支援＞」における「学生の実体験を重視した教育研究」の一つとして採択及び交付を受けて、進められた。採択されてから15年が経過するが、2020年1月に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が確認されてからの3年間は様々なことが制限され、学生同士のコミュニケーションを取る事が難しい時期もあった。

コロナ禍が収束し、制限が緩和されていく中で、これまでの「体験を重視した教育活動」を再開できたことは大きな意義があり、“Gプロジェクト”を通じて、学生たちが試行錯誤しながらも、自分の能力を最大限に発揮し、具体的な成果を上げることができたと考える。

現代社会における様々な課題に対応し、さらに自律的なキャリア形成を行うためには、知識・技術・技能の修得が不可欠である。“Gプロジェクト”のように実践的な活動を通して、「社会に必要とされる人間」、「地域社会の進展」に柔軟かつ的確に対応できる人材となることを期待する。

謝 辞

本研究にあたりまして、現代ビジネスコース2年生徳尾優那さん、迫姫乃さん、原田鈴鳴さん、岩元楓さん、小谷悠歩さんにご協力をいただきました。厚く感謝して、ここにお礼申し上げます。

参考文献

樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022). 動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング ナカニシヤ出版